岩佐又兵衛における古絵巻の利用について

東京大学 飯島 沙耶子
IIJIMA Sayako

岩佐又兵衛（1578～1650）が、福井から京都を経由して江戸へ下った際に著した紀行文、『廻国道之記』には、『伊勢物語』『源氏物語』『古今和歌集』仮名序など、古典文学からの引用がちりばめられており、又兵衛がいかに古典に親しんでいたかが知られる。

又兵衛の画業について論じる上でもまた、古典の学習、特に古絵巻の学習についての考察は欠かすことができない。又兵衛画に古絵巻の影響が見られることは、たびたび言及されてきたものの、具体的な検討作業は未だ不十分である。又兵衛がどのように画技を身に付けたのか、その師事関係を確定する文献史料が不足している現在、又兵衛が学んだと考えられる古画を探索することは、その画風形成や制作方法を探る上でも大きな意味を持つだろう。そこで本発表では、又兵衛が目にし、自身の粉本としていたと考えられる古絵巻を探索し、又兵衛、及びその工房の作と判断される一連の作品との比較を行い、又兵衛がどのように自身の作品の中に古画学習を血肉化させていったかを検討する。

さて、又兵衛画の人物描写に見られる「豊頬長頤」と呼ばれる特徴が、又兵衛の独創によるものではなく、「平治物語絵巻」等の鎌倉時代の合戦絵巻に、その原型が見出せることは既に指摘されている。また山根有三氏は、又兵衛工房作と目される「豊国祭礼図屏風」（徳川美術館）の群集描写の中に、「平治物語絵巻」の内、現在は断簡と白描模本で残る、六波羅合戦巻の図様が転用されていることを指摘した。その後、山根氏の指摘を深める研究はなされていない。本発表では山根氏の提示した他にも、図様の転用箇所が認められることを指摘すると共に、舟木本「洛中洛外図屏風」（東京国立博物館）においても「平治物語絵巻」の図様が時世風俗へと巧みに描きかえられている点を報告する。さらに、この 2 作品には、信西巻（静嘉堂文庫美術館）、及び六波羅行幸巻（東京国立博物館）に見られる図様を転用した部分も見出されることから、又兵衛は山根氏が指摘した六波羅合戦巻以外の巻も目にしていたと考えられる。

また、工房で制作された長大な古浄瑠璃絵巻群についても、描写内容を検討してみれば、制作にあたって古絵巻が大いに生かされていることが了解される。又兵衛が参照したと思われる古絵巻は、「信貴山縁起絵巻」「伴大納言絵巻」弘安本系「北野天神縁起絵巻」「酒飯論絵巻」等、多岐に渡る。本発表では、又兵衛がこれらの絵巻に見られるモチーフを変容させながら、自身の画の中に巧みに取り入れていく様相を報告する。

古絵巻を参照することで、遡っては平安時代の絵巻から連綿と蓄積されてきた造形語彙を得た又兵衛は、それらを用いて時世風俗画や古浄瑠璃絵巻群を生み出した。「新に前人の未だ図さざる所の體を模写し、世態風流、別に一家を成す」（『岩佐家譜』）とも評された又兵衛にとって、古典がいかに重要だったかを明らかにしたい。